

続「子、親を選べず」その四



口ではあれこれぶつくさ言っている真之介君でしたが、正直な気持ちを言うと、お父さんといるのは、満更でもありませんでした。気を張らなくて済むし、カッコも付けなくて済む。気が楽で結構話が面白くもある。見ていると漫画の実写版みたいで、飽きが来ない。

しかし、自分がそれと同じ事を学校や友達の家でやる勇氣はありませんでした。曰く

「あれをそのまま外でやったら何を言われるか分らない。分らないどころか、村八分にされてまう」

なので、真之介君は外に出る度、自分の振舞いをどうしたら良いのか、いつも迷いながら歩いていました。

そんな自分のフラつきから来る居心地の悪さからお父さんを改めてみると

「あれはあれで、結構勇氣がいるねえやもしれんなあ」

と思う事もありました。

それである時、真之介君はお父さんに尋ねました。

「おとう、おとうは人の目とか気にならんのか？村八分とか、怖おうないん？するとお父さんは

「んっ？なんや又、改まって。熱でもあるんちゃうかあ？」

「平熱や」

「で、又なんでそねいな事、訊きよる？」

「おとうみたいに脳天気な暮らせたら、楽やろうなあ、思うて」

「真之介は、楽やないんか？」

「楽やない、言うよりなんやら、ふわふわ、グラグラ落ち着かんねえや」

「さよかあ。そりゃ、難儀やなあ」

「おとうは、昔からそんな、やったん？子供の頃から
するとお父さんは暫く思い出す様な目になってから

「うんにゃ。子供の頃は、親戚の集まりで、みんなが海老を食ったまま食べる「躍り食い」
するのを見て、泣き出したりしたものでやから、その時以来、弱虫がんとか臆病風の雁
之助とかいわれよったなあ。学生時代にも、アルバイト先の社員の人から「社会のお荷物で
しかないなあ、お前」とよく言われたし、勤めにできるようになってからは上司に「何度いっ
たらわかるんだ。何故マニュアル通りにやらん？自分流でやるな」と怒られてばかりで、自
信の「じ」の字もなかったわ」

「へえ、意外なやあ。知らなあんだ。せやけど、いつから180度変わってもうたんや？今の
羽目外してお気楽満載のガキンチョタイプに」

「ガキンチョ？なんや、それ。わしは大人や、ぞ」

「まあ、細かいことは気にせんで」

「そんな自分が、や、ある時命に関わる様な大手術をする事になったねえや。麻酔が醒めて
目を開けた時にこの世の景色が見えるか、もうそのまま見えないで終わりか、いうようなや
っちゃ、な」

真之介君は、知らない間に身を乗り出していました。

「己は未だ小さい頃やったから、覚えてひいんやる。父ちゃんが三ヶ月位、家にいんかった
事」

「おらなんだあのは、おぼえとお。しやけど、おかんにおとうはどこいったんやあ？訊いて
も、お仕事で、いうてた」

「さよかあ、心配させとうなかったんやろう」

そこに電話が掛ってきました。

「続きは明日。これから仕事や」

お父さんはそう言い残して出かけていきました。